

児童養護施設等における「児童間性暴力“0”へのロードマップ」 ～予防・早期発見・効果的介入のために～

本研究は公益財団法人日本生命財団
「児童少年の健全育成実践的研究」からの助成を受け実施しています

関西福祉科学大学

関西学院大学

児童養護施設三光塾

大阪府池田子ども家庭センター

遠藤 洋二

原 弘輝

早川 一穂

奥成 良平

日本子ども虐待防止学会 第27回学術集会かながわ大会 COI開示

＜発表者＞

関西福祉科学大学

関西学院大学

児童養護施設三光塾

大阪府池田子ども家庭センター

遠藤 洋二

原 弘輝

早川 一穂

奥成 良平

※演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

発表1:「アンケート調査、インタビュー調査から分かったもの」



はじめに -研究の概要-

<目的>

入所型児童福祉施設における児童間性暴力事案の具体的な内容、対応の現状や課題を明らかにしたうえで、現場の実践知・臨床知を集約し、包括的な実践モデルを提示、さらには、実践現場に還元していく。一方的なマニュアルを提示するという形ではなく、施設の特徴や地域性、他機関との関係性なども踏まえた多機関連携型実践モデルの開発を、現場職員とともに作りあげていくことが最終目標である。

なお、本研究についてはこれまでも以下報告を行ってきた。

- 児童養護施設等における児童間性暴力の実態と予防・早期発見・対応に関する取り組みと課題に関する研究 遠藤 洋二・原 弘輝・永井 友基・篠原 拓弥 2019
(日本子ども虐待防止学会 第25回学術集会 ひょうご大会 公募シンポジウム)
- 児童養護施設等における児童間性暴力の実態に関する調査研究 原 弘輝・遠藤 洋二 2020
(日本子ども虐待防止学会 第26回学術集会 いしかわ金沢大会 口頭発表)

今回の報告では、上記報告でも紹介したアンケート調査の結果総括ならびにインタビュー調査の結果概要について報告する。

なお、上記報告での報告スライドは神戸児童間性暴力研究会 ホームページより
閲覧可能なため、必要に応じて、右記QRコードより参照ください。



アンケート調査から分かったこと(1)

	項目	結果	求められる対応
加害児童	性別	男児が89.3%と高くなっている。	<ul style="list-style-type: none"> 加害になりうることに對し、理解を促す教育・支援の実施
	年齢	約4割が12才以上15才未満であり、12才未満も4割程度と高い。	<ul style="list-style-type: none"> 思春期入り口や思春期以前の児童への支援体制の構築
	知的能力発達障害	軽度遅滞域以下が28.3%と高くなっており、33.1%が発達障害をもつ児童である。	<ul style="list-style-type: none"> 知的、発達に課題のある児童へ向けて特化した取りくみの推進
	入所期間	入所後3年未満での加害行為が36.4%であると同時に3年以上6年未満が30.5%となっている。	<ul style="list-style-type: none"> 施設による入所前アセスメントの強化 児童相談所とのケース情報等の連携向上

※神戸児童間性暴力研究会 2020 公益財団法人三菱財団社会福祉研究助成「児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究」pp22 表27をもとに報告者修正

アンケート調査から分かったこと(2)

	項目	結果	求められる対応
被害児童	性別	男児の被害が64.0%、女児が36.0%となっており、加害児における割合と比較して女児の割合が高くなっている。	<ul style="list-style-type: none"> • 女児を対象とした、被害のリスクを適切に理解し、予防を促すための教育・支援の実施
	年齢	各年齢層で一定程度推移	<ul style="list-style-type: none"> • 被害にあわないための取り組みを全体に対して実施
	知的能力 発達障害	軽度遅滞域以下が17.2%、発達障害を有する児童も24.4%となっている。	<ul style="list-style-type: none"> • 知的、発達に課題のある児童へ向けて特化した取り組みの推進

※神戸児童間性暴力研究会 2020 公益財団法人三菱財団社会福祉研究助成「児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究」pp23 表29をもとに報告者修正

アンケート調査から分かったこと(3)

		結果	求められる対応
ケース	加害被害関係	男児→男児が62.0%と高い同性間ケースが70.8%と高い	<ul style="list-style-type: none"> 純粋な性衝動のみでないさまざまな要因が存在することの理解と要因に関する分析
	発生時間	18時～24時が55.3%と高い	<ul style="list-style-type: none"> ハイリスクな時間帯を把握した上で施設としての対策(職員配置など)を検討
	発生回数	1回と複数回が約半数ずつとなっている	<ul style="list-style-type: none"> 加害行為を繰り返させない、被害行為を最小限にとどめるための早期発見体制の構築
	発覚の端緒	被害児の申告と職員の発見がそれぞれ1/3ずつとなっている	<ul style="list-style-type: none"> 早期発見に向けた職員のリスク管理能力の強化 児童が申告しやすいような関係づくり

※神戸児童間性暴力研究会 2020 公益財団法人三菱財団社会福祉研究助成「児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究」pp24 表30をもとに報告者修正

アンケート調査から分かったこと(4)

		結果	求められる対応
ケース	初期対応職員の 経験年数	すべての層で一定程度推移	<ul style="list-style-type: none"> 新任～ベテラン職員に向けた実用的な対応マニュアル等の策定
	発生場所	9割以上が施設内、なかでも居室等閉鎖空間が6割以上を占める	<ul style="list-style-type: none"> プライベート空間でのリスクアセスメントとそれに対応した施設のシステム作り
	発覚後の加害児 対応	7割近くが施設内指導、28.5%が一時保護となっている	<ul style="list-style-type: none"> 児童相談所などを含めた、他機関連携システムの構築
	一時保護後の 対応	施設復帰が約4割。児童自立支援施設への措置変更も約4割	<ul style="list-style-type: none"> 児童自立支援施設における事後のケア体制の構築 児童養護施設-児童自立支援施設間における効果的な連携

※神戸児童間性暴力研究会 2020 公益財団法人三菱財団社会福祉研究助成「児童養護施設等における児童間性暴力の予防・発見・対応に関する実践モデル開発に関する研究」pp24 表30をもとに報告者修正

調査対象と方法【インタビュー調査】

<調査対象>

調査については、過去に施設内で児童間性暴力が発生した児童養護施設を対象とした。

研究の性質上、調査協力を依頼する施設に対し、事前に趣旨・倫理的配慮・方法等を説明し了承を得たうえで調査を進めていった。先述のアンケート調査の調査協力施設の他、先駆的な取り組みを行っている児童養護施設を有意抽出した。

<調査方法>

半構造化インタビューで実施。

調査対象施設で起きた特定の児童間性暴力について、事前に作成、送付をしたインタビューガイドに沿って、半構造化インタビューの形で実施。

インタビューのデータは同意書に署名をもらった上で、ICレコーダーにて録音をしている。

倫理的配慮

調査にあたっては、依頼の段階で以下を記載した文書を送付し、了解を得たうえで訪問調査を行い、訪問時に再度口頭説明を実施し、同意書に署名をもらい、回収している。

- ① 調査への回答は任意である。
- ② データは個人が特定できない状態で収集され、収集されたデータは厳重に保管するとともに、研究者・共同研究者・研究補助者以外が取り扱うことはなく、本研究以外の目的には使用されない。
- ③ 収集されたデータは統計的に処理し、個人名・施設名が特定できないよう処理する。
- ④ 収集されたデータは本研究終了後に破棄する。
- ⑤ 研究結果は、要請があった施設には提供する。

なお、本研究は、代表者が所属している関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を得て上で実施している。

調査項目【インタビュー調査】

<インタビューガイド>

- ① 発生した児童間性暴力事案について
- ② 事案について、おこなった初期対応
- ③ 加害児、被害児それぞれに対する支援内容
- ④ 事案、施設(他の児童、職員、集団など)に与えた影響
- ⑤ 事案対応にあたっての他機関連携
- ⑥ 支援、対応をする上で困ったこと
- ⑦ 事案発生後、施設が工夫・改善させた取り組み
- ⑧ 当時を振り返って、対応や支援で足りなかった点

調査協力施設ごとの調査概要【インタビュー調査】

施設ID	調査実施年月日
1	2019/4/24
2	2019/5/19
3	2019/5/20
4	2019/5/31
5	2019/6/4
6	2019/6/28
7	2019/6/29
8	2019/7/7

※調査にかかったインタビュー時間はいずれもおおむね1時間程度であった。

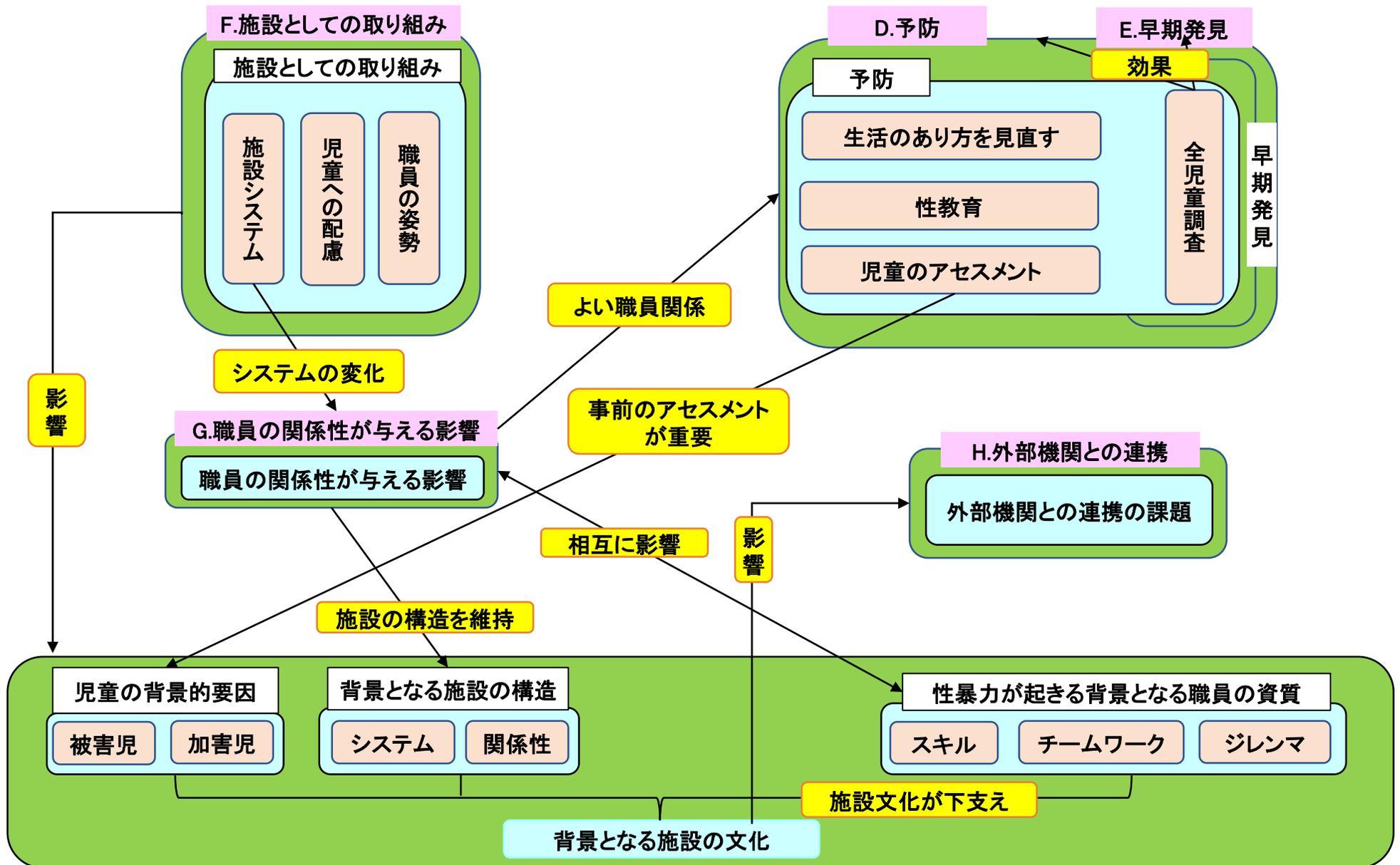
分析方法【インタビュー調査】

＜分析方法＞

データ分析方法としてはKJ法を採用し、以下の手順を進めた。

1. インタビュー実施者が、インタビューの逐語録の言語データから「児童間性暴力の実態」「対応方法」「臨床の知」「施設の取り組み」に関する部分ごとに切片化した。
2. 切片化された言語データを協働研究者2名単位に分かれ、それぞれのデータにラベル（見出し）をつけた。
3. それぞれのラベルに応じ、カテゴリーを編成し、カテゴリー間の関係性やカテゴリー内の構造を図解で示した。

児童間性暴力をなくすための取り組み



発表2:「調査で判明した各施設の工夫」



児童養護施設 三光塾

早川 一穂

インタビュー調査の概要

* 対象

全国の児童養護施設 9施設

(地域：関東4、関西1、中国1、九州3)

* 期間

2018年9月～2019年7月

* 調査方法

半構造化面接（インタビュー）：30分～1時間弱

（インタビュー項目は次スライド参照）

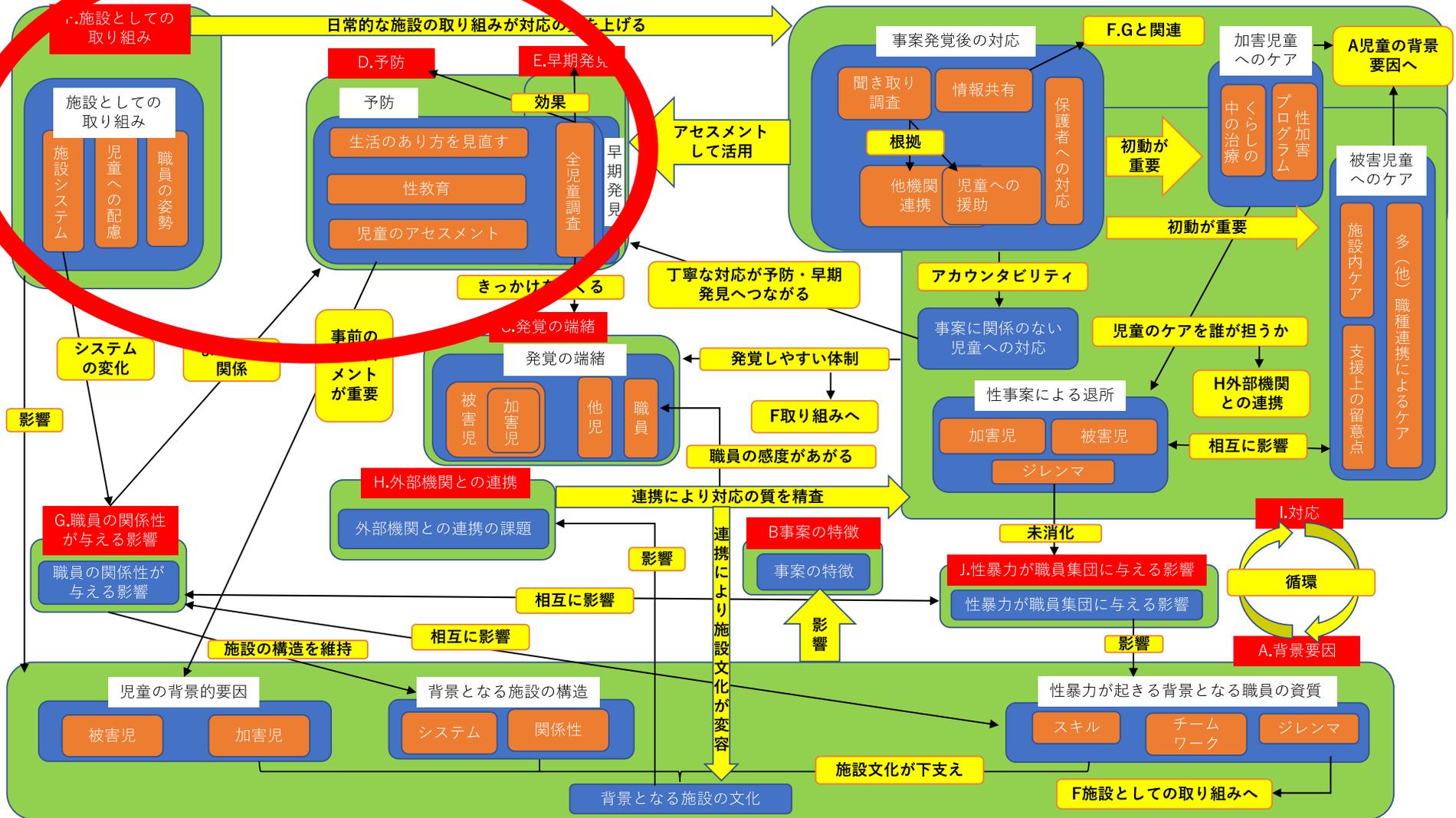
* 分析方法

児童相談所・児童養護施設などの児童福祉の専門職員10人ほどで
KJ法を用いて分析を行った（分析結果は図1を参照）

インタビュー項目

- ①児童間性暴力事案について具体的に教えてください。
- ②事案について、どのような初期対応を行いましたか。
- ③加害児、被害児それぞれにどのような支援を行いましたか。
- ④事案が発生したことによって、施設（他の児童、職員、集団など）にどのような影響がありましたか。
- ⑤事案に対応するにあたって関係機関と連携しましたか。した場合はどの機関とどのようにしましたか。
- ⑥支援、対応で困ったことは何ですか。
- ⑦事案が発生した後、施設が工夫したり、改善したりした取り組みはありますか。
- ⑧当時を振り返って、対応や支援で足りなかったと思うことはありますか。

KJ法による分析結果(図1)



調査で見えてきた各施設の取り組み

- 1) 児童のアセスメント
- 2) 施設環境のアセスメント
- 3) 生活のあり方を見直す
- 4) 性教育の実施
- 5) 全児童調査の実施

1) 児童のアセスメント

① 入所時のアセスメントの重要性

入所前に児童相談所と児童のアセスメントを丁寧に共有する

- ⇨特に性問題のリスク等を掘り下げて話し合っておく
- ⇨性被害の有無や児童の傷つきに焦点をあて、入所後にどのようなケアを重視して行っていくのかを確認・共有しておく
- ⇨問題が起こってから聞き取りに本腰を入れるのではなく、問題が起きる前から継続してアセスメントに取り組む姿勢が大切である。

② 自立支援計画の策定・活用

策定：目の前の課題だけでなく長期的なケアの視点をもつ

活用：定期的な評価／見直しを行い、その際には日常生活や面接の中で児童の気持ちを聴く機会をもつ

- ⇨普段の生活の中で、児童が“本音を話してもいいんだ”という安心・安全感が重要
- ⇨児童の気持ちを聞くという取り組みが、施設の土台や風土になっていく

2) 施設環境のアセスメント

性暴力について考える際、児童の特性や背景に着目するだけでなく、施設そのものが抱える課題を明確にする

- ・ 物理的な問題：児童集団の規模、職員の配置、構造上の死角等
- ・ 施設文化の問題：支配-被支配の関係性ができやすい等
 - ▷職員同士の関係性が、児童同士の関係性にも影響する…
(先輩・後輩関係が支援の中で児童にも感じ取れてしまうなど)
 - ▷職員の児童への態度が、児童間の力関係にも影響する…
(年長児の発言が年少児よりも力を持つ、無理に敬語を使用させるなど)

対策：児童個人の居場所を確保する（集団から離れられる）
性暴力を含む全ての暴力をなくすという意識を共有する
児童が暴力防止に主体的に取り組めるシステムやルールをつくる

3)生活のあり方を見直す(1)

① 生活の個別化を図る

児童が自他の境界を意識できるようにする

例) 食器や衣類・バスタオルを個別に用意する

洗濯をまとめて洗わない

下着は共有の場所に干さない

入浴を時間がかかっても一人ずつ入浴する

シャンプー等を自分専用のもを使う

・・・など

集団管理をできるだけなくしていき、個別化することで家庭的な環境を整える

児童アセスメントに基づいて、状況に応じて生活環境を変える

(リビングでのソファの使用時に、距離をとれるように配置するなど)

一緒に生活する職員も境界線を意識し、児童同士での気になる距離感の場面では声をかける

⇨児童が違和感をもてるようになっていく

3)生活のあり方を見直す(2)

② 日常の関わりから性事案を発見する

日常生活の性的ワード・性刺激への職員の感度をあげる
(性的刺激の強いTV番組やアニメ、児童同士の会話など)

児童たちの言葉や声・表情からサインを読み取るために…

- ▷監視役でなく「大人が児童たちの生活を見守っている」態度
- ▷意図的に生活で児童と話す時間をもつ(例:週2~3日は就寝時間に話す)
性の話題だけでなく、児童の抱えているいろいろなことを話す機会にもなる

③ 児童の安心・安全をつくる支援を

日常生活の取り組み+職員が話を聞く姿勢/寄り添う姿勢

- ▷悩みを打ち明けやすい関係性を築いていくことにつながる
(性事案発生時に、当事者以外の児童からも情報が得られやすくなる)

加害・被害の連鎖を断ち切るため、性の問題に対して大人がきちんと対応していく
トラブルを起こしがちな児童に偏らず、落ち着いている児童も含めた全ての児童の
ケアを丁寧に行っていくことが必要

4) 性教育の実施(1)

① 性教育実施の素地が整っていることの大切さ

「性」の話は職員間でも価値観が多様：不和が生じやすい
⇒価値観には違いがあることを知っておくことが大切

【性教育を施設としてどう捉えているのかが重要】
性教育は日頃から行うことで性暴力の予防となる
一方的に知識を伝えるのではなく生活に落とし込む
職員の聞く姿勢が児童の話しやすさにつながる・・・など

② 性教育の取り組み

性教育委員会を組織／個別に担当職員が行う、等
共通点：外部講師を呼ぶ・担当職員が行うなど、より児童に伝わる方法を模索している。大人数よりも少人数・個別的に行う。

③ 性教育の工夫

性の話題を「言っても良い」と思えるように学習形式ではなくおやつを用意してあたたかい場をつくる、入浴中や個別外出の機会を捉える、等

4)性教育の実施(2)

④ 日常生活とのつながり

生理用品を職員と買いに行く、性の疑問・恋愛の話をタブー視しない、児童の身体のケアを丁寧に行う、など

⑤ 性教育の模索・現場の悩み

特別支援に在籍しているなど多種多様な児童がいる
長年続けてきた性教育に児童がマンネリ化している
職員主体の性教育となって児童が離れていく／形骸化
勤務体制の中で性教育の優先順位がさがって実施困難に… など

⑥ 性教育がうまくいっている施設の取り組み

性教育の中核職員たちが全職員の意識の統一を行う
施設をあげて性教育のスキルアップを試みる
中堅職員によるケア検討委員会を継続する など
◇性教育が予防になる／性暴力発生時にも職員に相談することができる

★性教育は性暴力事案の対処法ではなく、予防につながっている
日頃から丁寧に性教育を行うことで、性暴力発生時すぐに相談ができる

5) 全児童調査の実施(1)

① 全児童調査の実施と工夫

★全児童調査とは：児童に性暴力・暴力などの被害を受けていないかを確認するもの。性暴力・暴力に関係している児童だけでなく、入所児童全員に聞き取りを行う。

きっかけ：過去に大きな児童間暴力・性暴力が起こったことから、職員が把握している事案以外での潜在的な被害・加害を明らかにするために始めた施設が多い

【方法】

- ・聞き取り用紙の項目をもとに聞き取りを行う
- ・定期的に聞き取りを行う（月1回、3ヶ月に1回など）
- ・施設全体の取り組みとして行う・・・などの方法をとっていた

【工夫】

- ・年齢に応じて聞き方を変える（絵・図を用いる）
- ・暴力が起こっていない平時にも定期的に行う
- ・担当者以外の職員からも聞き取りを行う／聞き取りを担当者と交互に行う
- ・全職種による施設全体の取り組みとして行う・・・などの工夫があった

5) 全児童調査の実施(2)

② 全児童調査の効果・活用

聞き取り内容をもとに児童同士の関係性／暴力の起こりやすい時間帯・状況を把握でき、生活の見直しを行うことができる

比較的小さな暴力・性的関わりから適切に対応できる

早期発見できて、潜伏化・深刻化の予防につながる

児童が職員にどんな些細なことを話しても聞いてもらえる、という安心感をもつことができた。職員-児童の信頼関係を築けた

◇児童の些細な変化・サインに気づいて共有することができるように

◇暴力や性暴力に対する職員の感度・対応が向上したという変化も

★全児童調査を定期的に行なっている施設が多く、性暴力・暴力を早期発見できるだけでなく、予防的な意味合いをもつようになっていった。

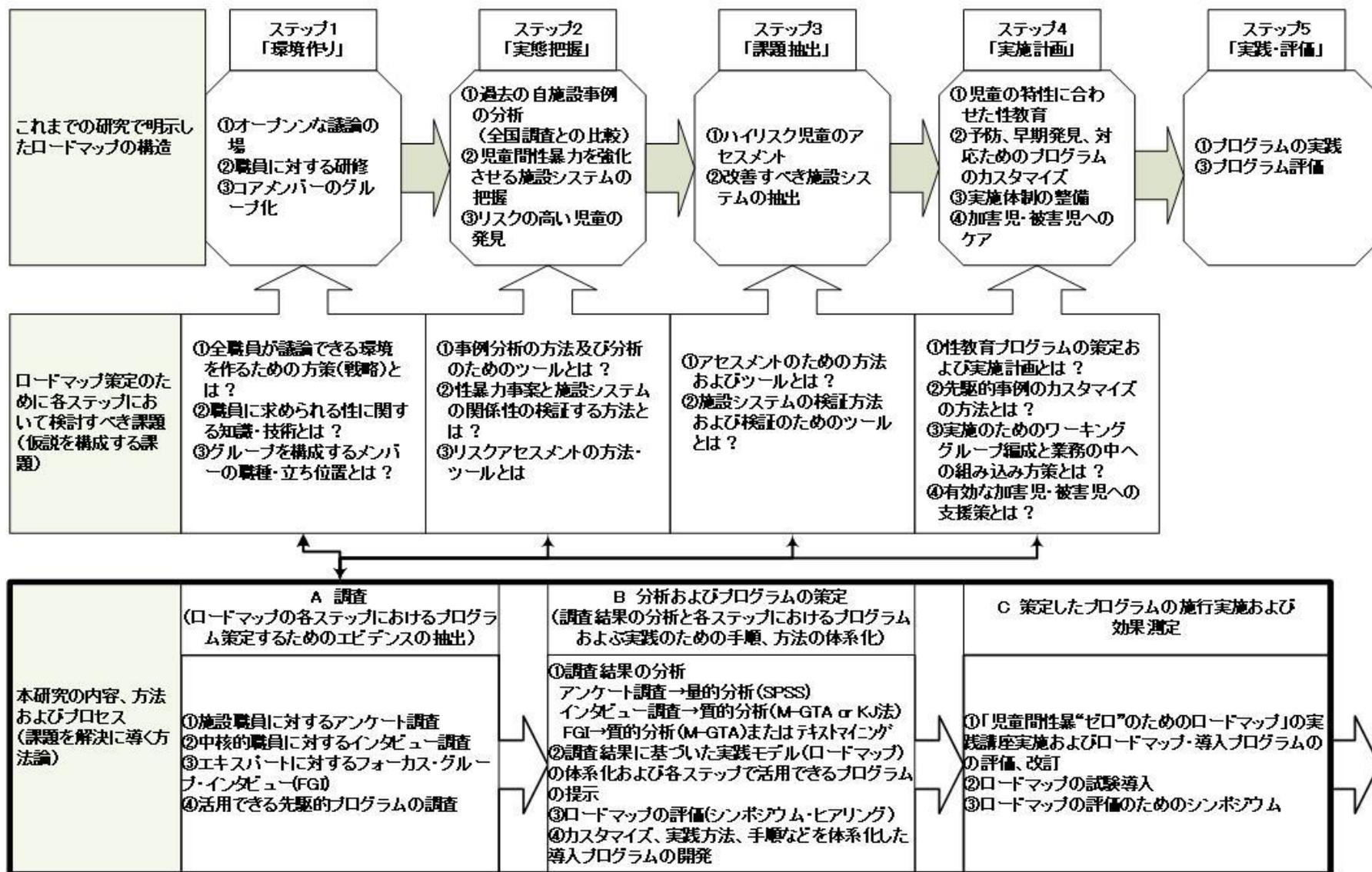
★実施には職員と児童の力関係がなく、児童が安心して話せる施設文化／職員への不満・批判も受け付けるというスタンスが必要となる。

発表3:「児童間性暴力に対応する実践モデルの意義」

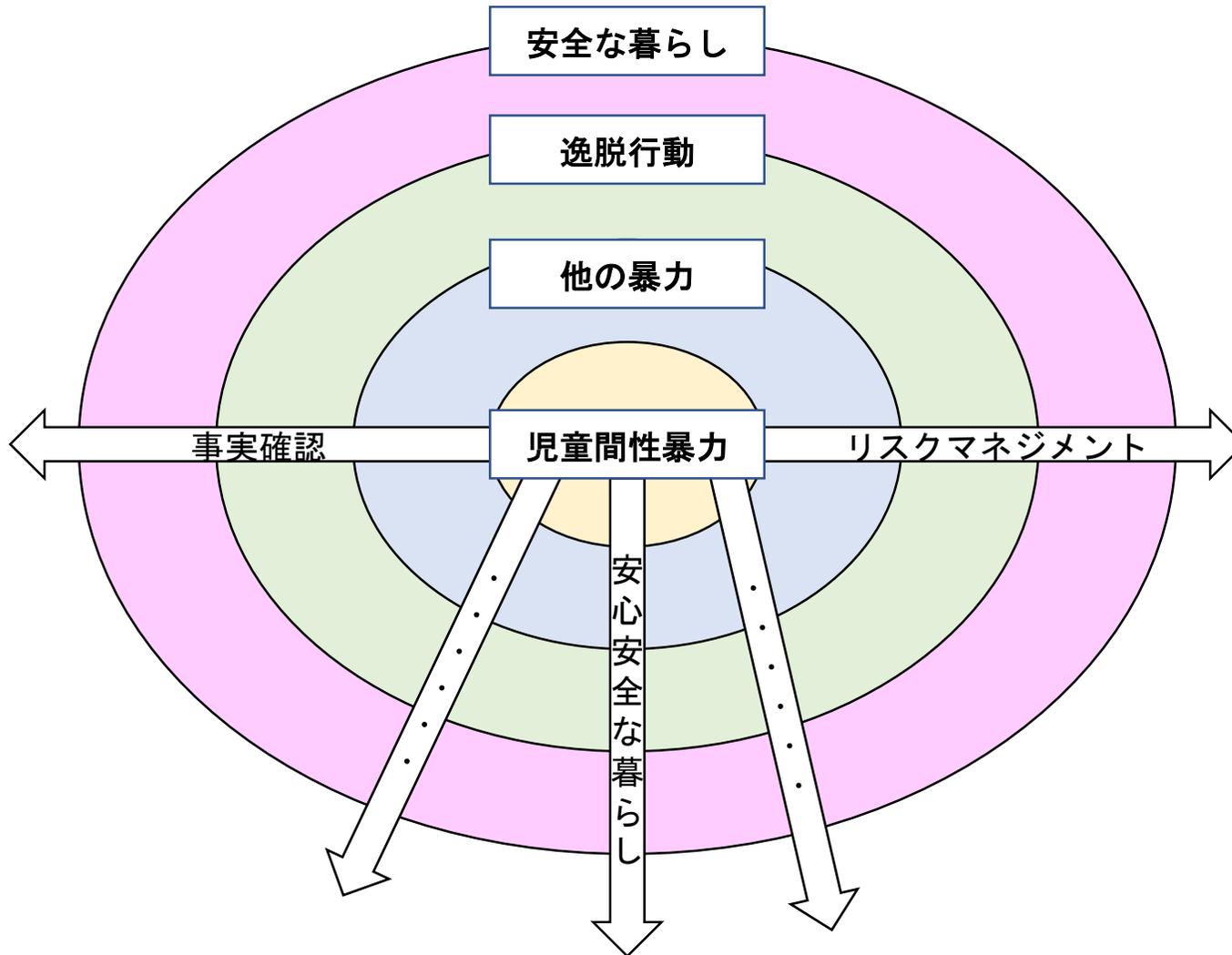


実践モデル開発の全体像

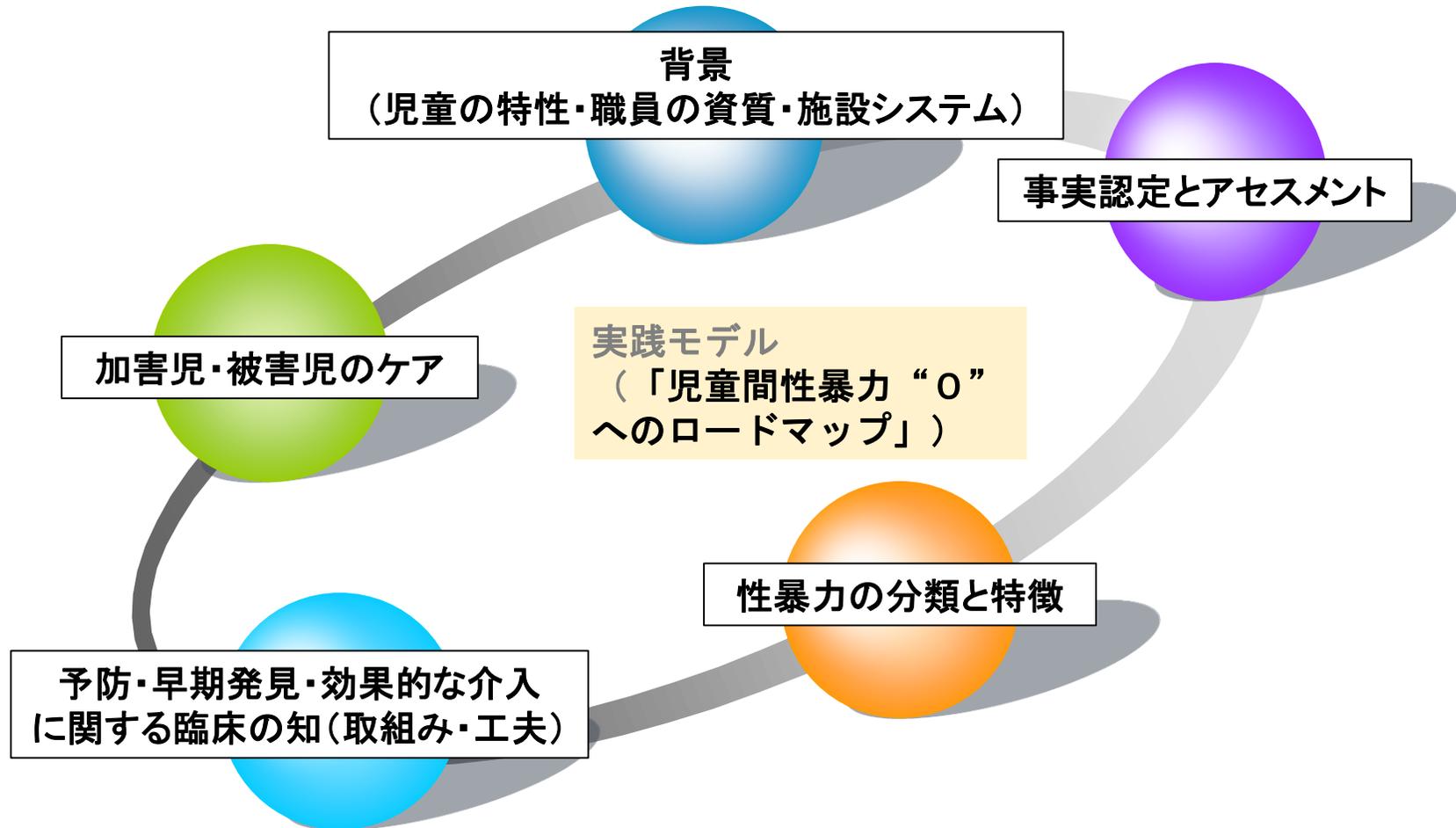
【 児童間性暴力“ゼロ”のためのロードマップ」策定のためのプロセス 】



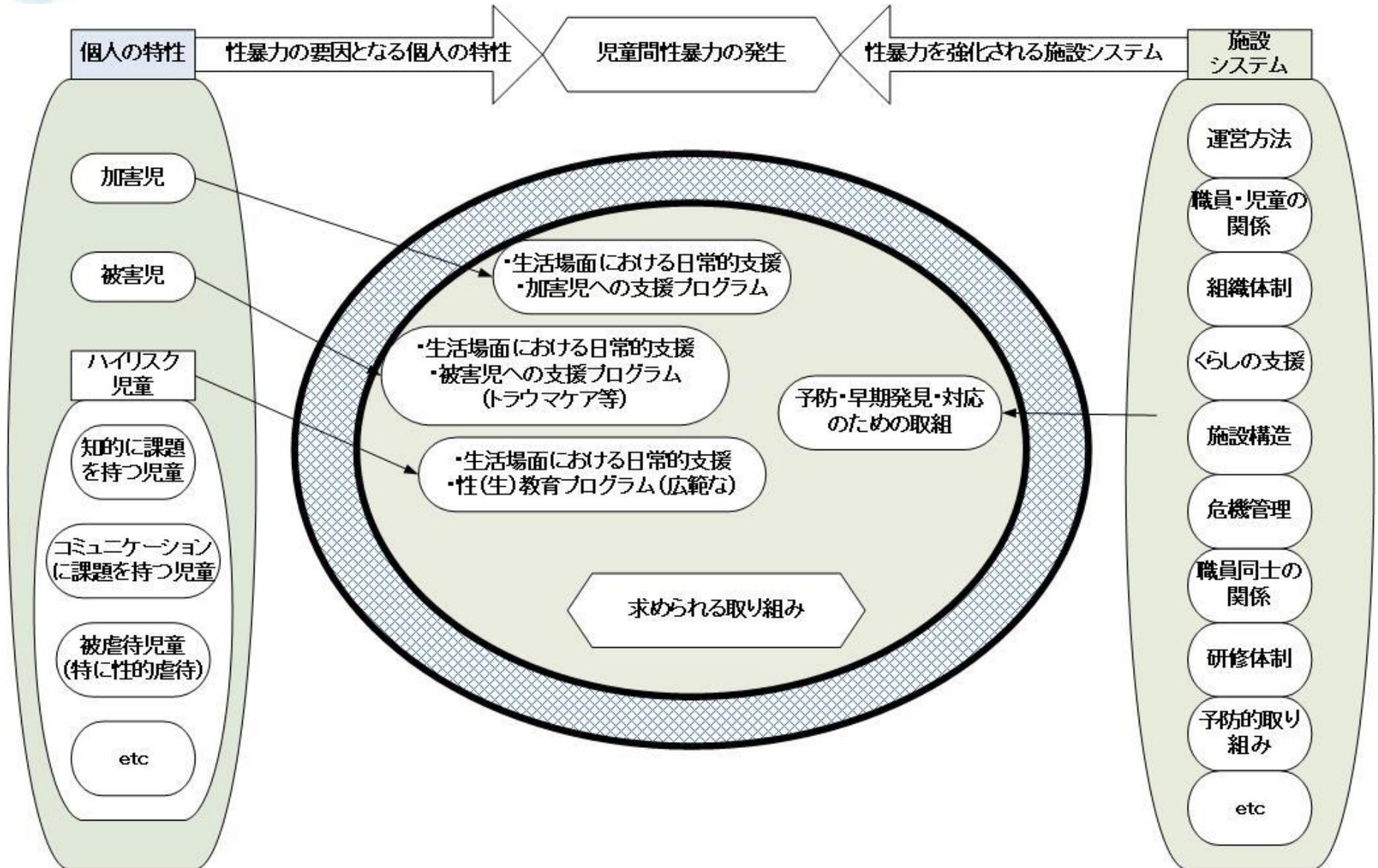
限定的実践モデル (Specific Practice Model) の意義



実践モデル開発の視点



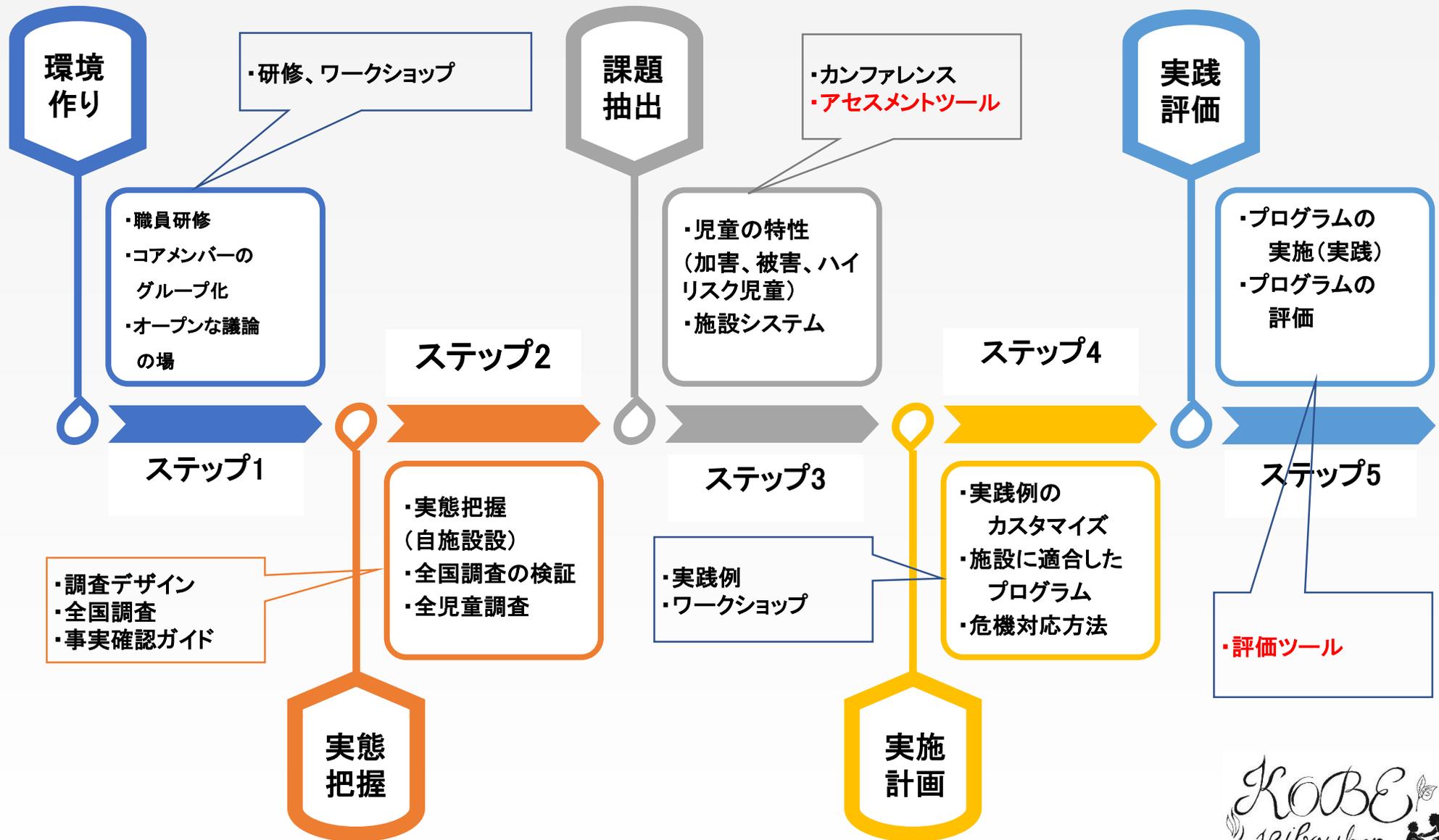
児童間性暴力の構造



児童間性暴力の予防・早期発見・介入のために



児童間性暴力「0」へのロードマップ(例示)



ステップ1:環境作り

職員研修

- ・性的遊びと性問題行動
 - ・子どもの性的発達
 - ・職員の性意識
 - ・児童間性暴力の現状と課題
 - ・性暴力が子どもに与える影響
 - ・
 - ・
- (研修、ワークショップ例)

全職員参加の研修を

コアメンバーの組織化

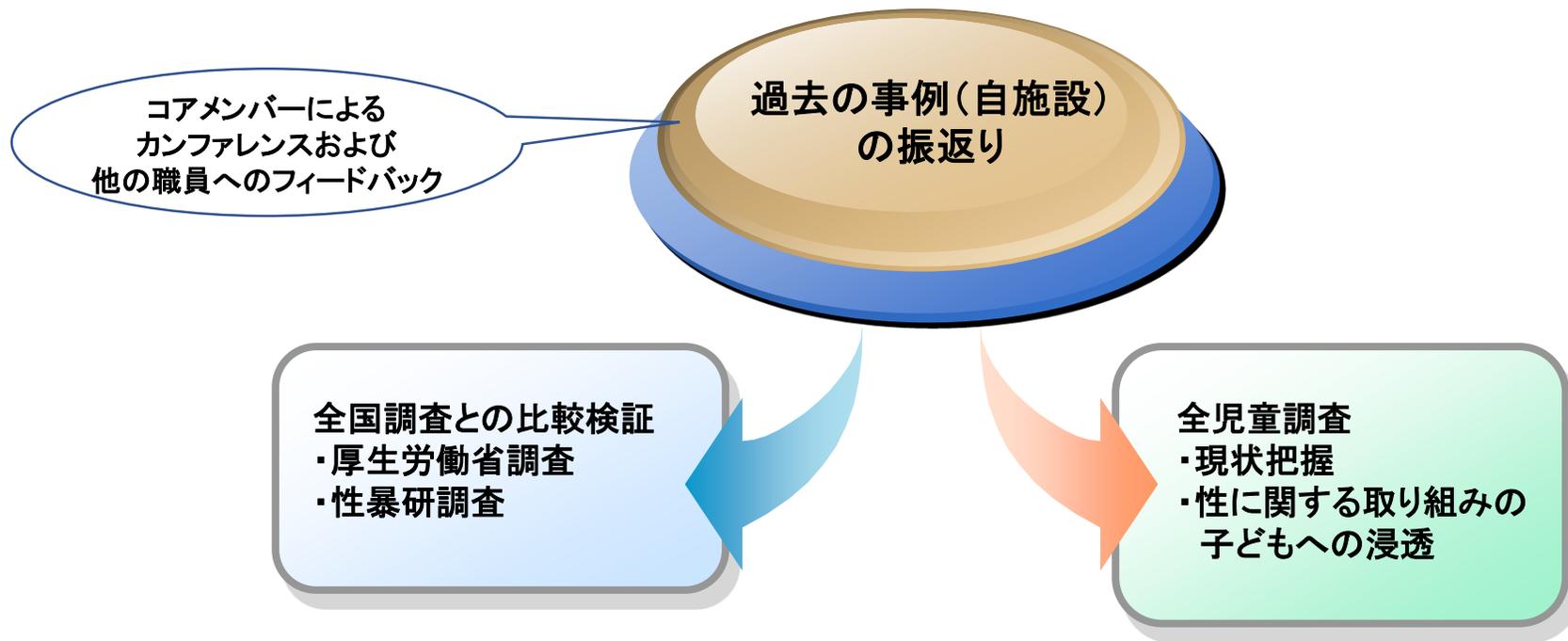
- ・中核となる職員の養成およびグループ化
- ・外部メンバーとの波長合わせ
- ・専門性の高い研修(RIFCR、司法面接等)
- ・先行事例研究
- ・施設全体への情報提供
- ・子どもへのアプローチ
- ・
- ・

オープンな議論

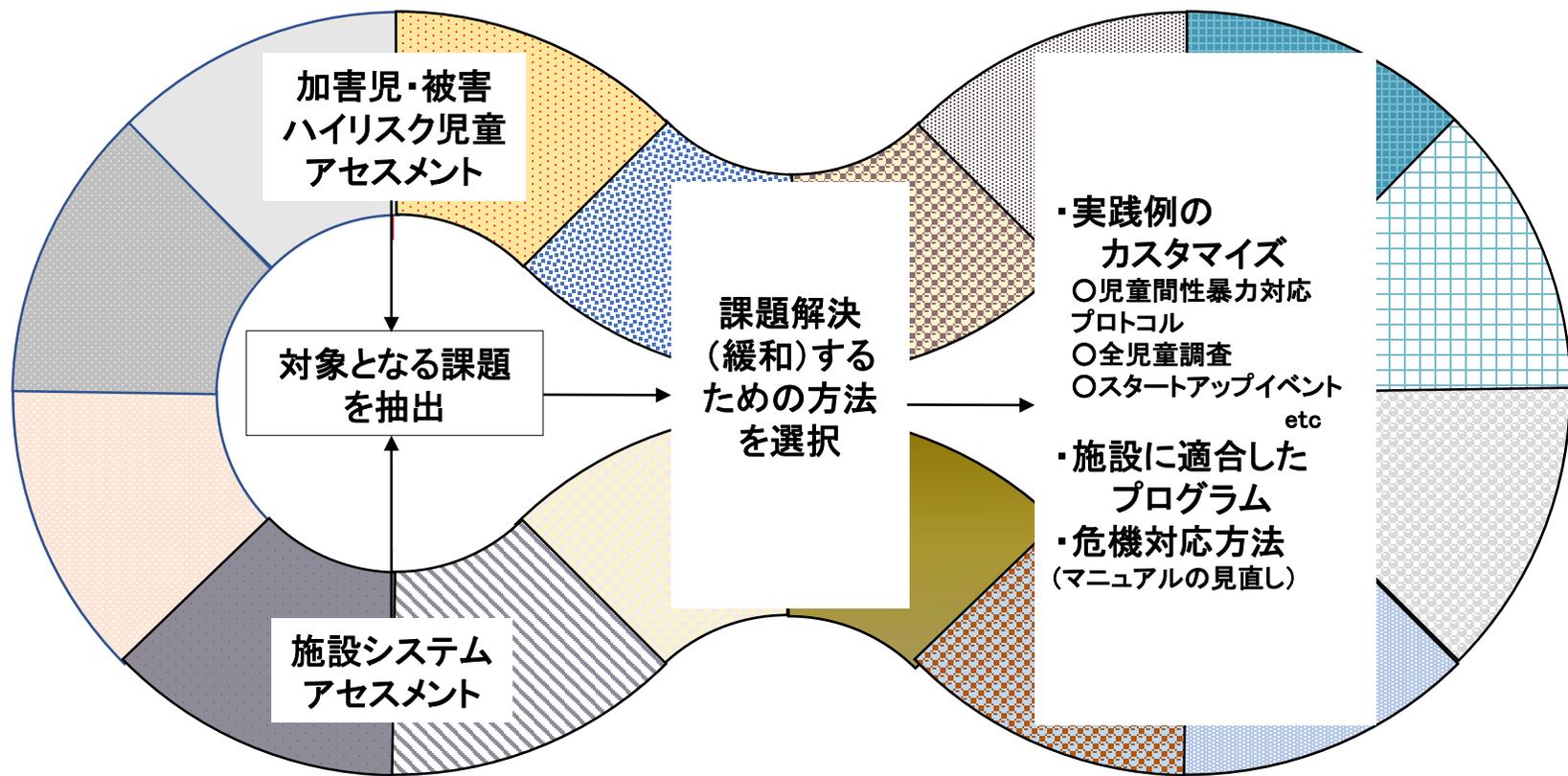
- ・性意識ワークショップ
- ・性教育の見直し
- ・“暮らし”の見直し
- ・
- ・

性の取り組みを特殊なものとしないう工夫

ステップ2: 実態把握



ステップ3・4: 課題抽出、実施計画



発表4:「『児童間性暴力“0”へのロードマップ』策定の取り組み」



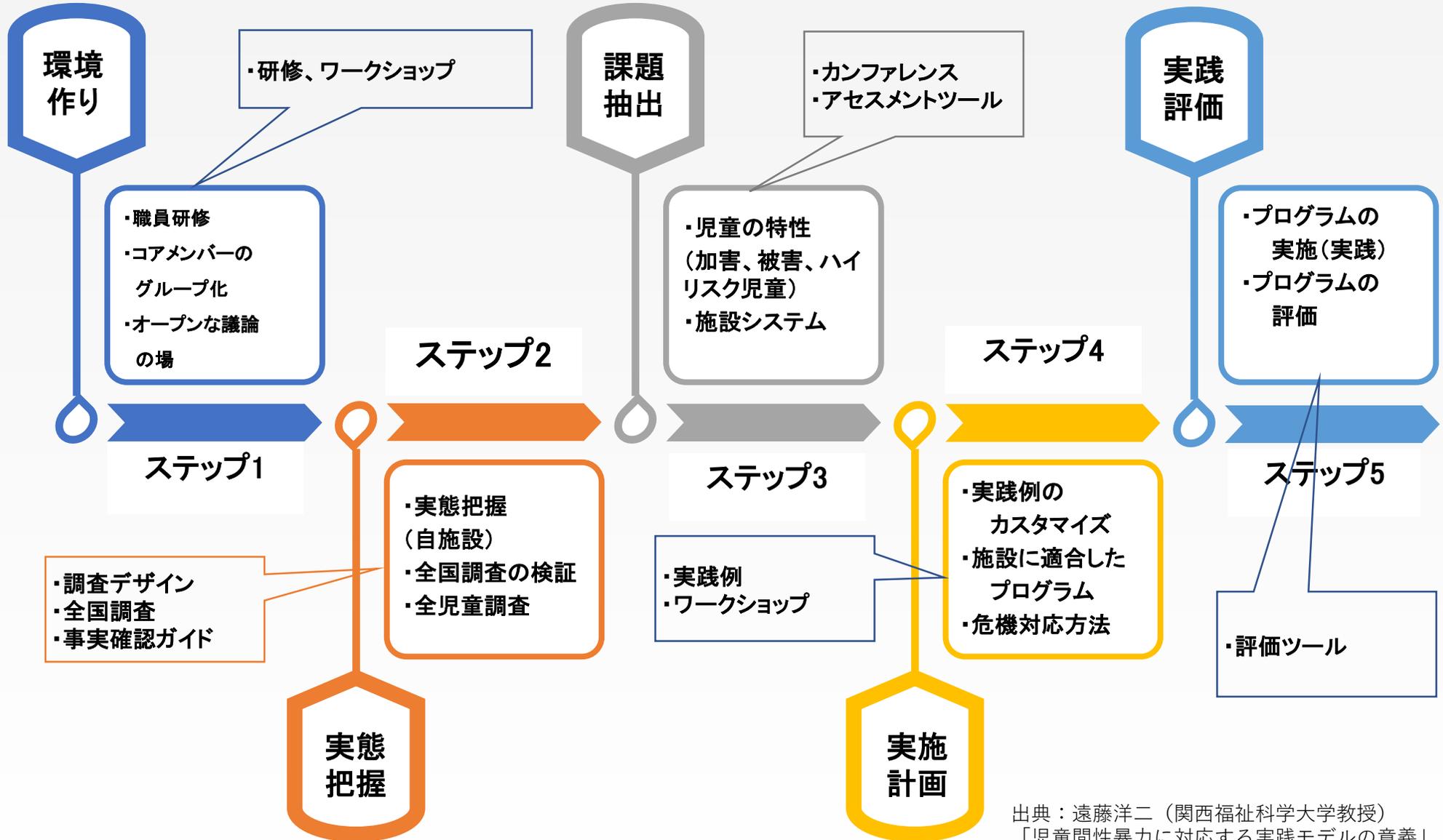
策定取り組みの現状：モデル事業

全国3施設で実施中

A県	A施設(児童養護施設)	
B県	B施設(児童養護施設)	
C県	C施設(児童自立支援施設)	

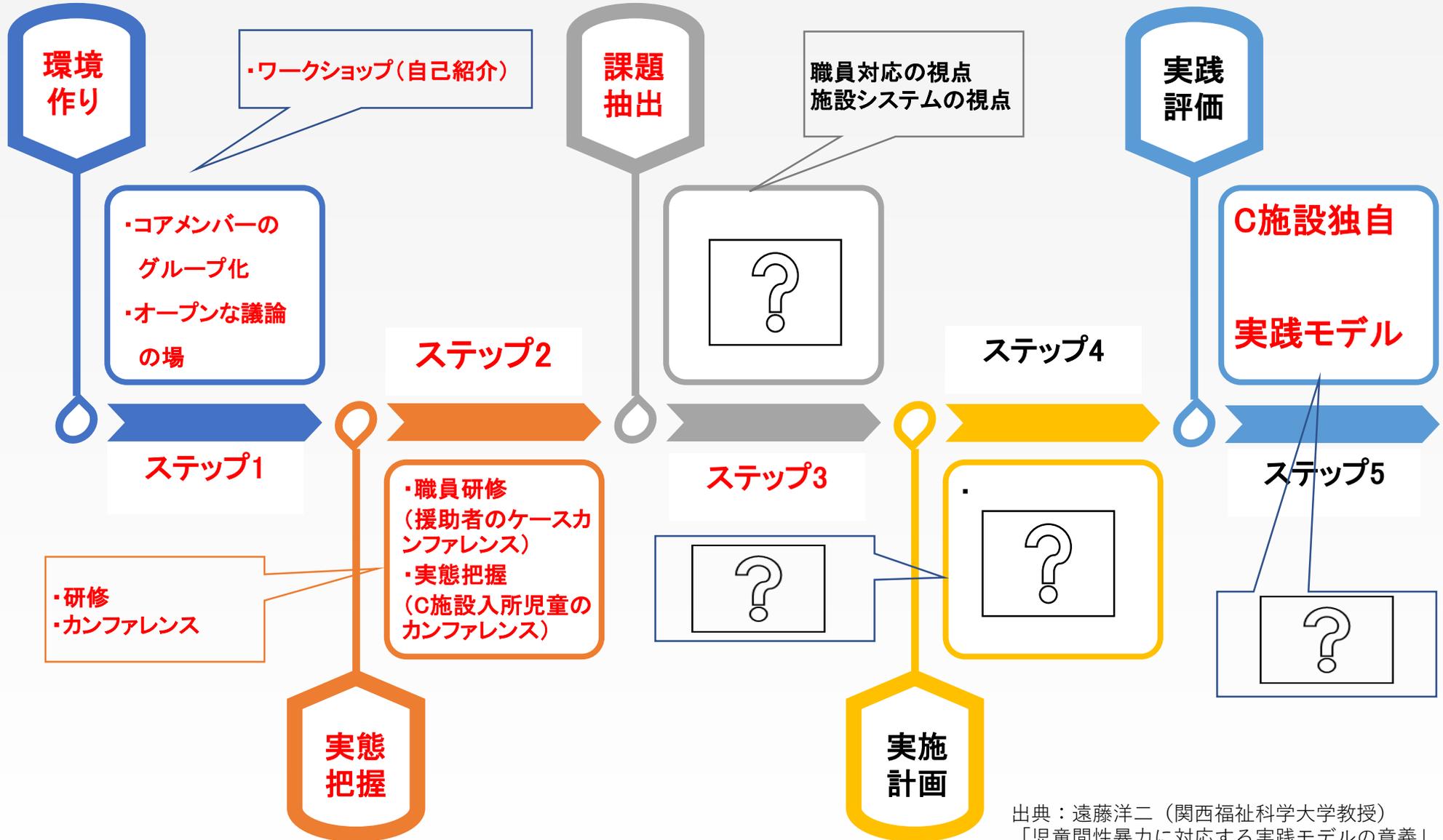
今回は**C施設(児童自立支援施設)**の取り組みについて報告します。

児童間性暴力「0」へのロードマップ(例示)



出典：遠藤洋二（関西福祉科学大学教授）
「児童間性暴力に対応する実践モデルの意義」

児童間性暴力「0」へのロードマップ(C施設の進行状況)



出典：遠藤洋二（関西福祉科学大学教授）
「児童間性暴力に対応する実践モデルの意義」

モデル事業：第1回ワーキング（波長合わせ）

概要	2021年3月25日（木） 10時～12時 @C施設 研究会：4名 C施設職員：10名 参加
内容	5つのプログラム実施 ①オリエンテーション(自己紹介等) ②モデル事業の趣旨・概要(研究会チーム) ③施設における性暴力の実態と取り組み ④環境づくりのための方策 ⑤今後の予定・その他
成果・考察	各職員が不安に思っていることをディスカッション 性暴力に対面した時の対応。性別ならではの起きることについて質問多数。行動や対応方法への懸念。 施設内での共有方法に疑問。女兒特有の課題何か

第1回ワーキングを踏まえステップ1（環境づくり）～ステップ2（実態把握）へ
第2回ワーキングは事例カンファレンス実施し、フィードバックしていくことに

第1回ワーキング:波長合わせ

活用ツール(ワークショップ用:自己紹介シート)

別紙①

自己紹介シート (みほん) なまえ:

A わたしは〇〇です。

配属先は〇〇です。

職歴は〇〇年です。

B 趣味は〇〇です。

マイブームは〇〇です。

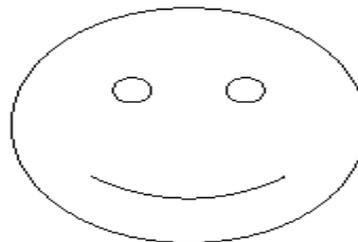
得意なことは〇〇です。

C 今回の期待することは

〇〇です。

気になることは〇〇です

D



A,B,Cで自己、他者理解。その後、モデル事業の概要・趣旨を説明。

Dは困っていること、知りたいことをシートの裏面に記入 = ニーズ調査

ステップ1:環境作り(例示)

職員研修

- ・性的遊びと性問題行動
 - ・子どもの性的発達
 - ・職員の性意識
 - ・児童間性暴力の現状と課題
 - ・性暴力が子どもに与える影響
 - ・
 - ・
- (研修、ワークショップ例)

全職員参加の研修を

コアメンバーの組織化

- ・中核となる職員の養成およびグループ化
- ・外部メンバーとの波長合わせ
- ・専門性の高い研修(RIFCR、司法面接等)
- ・先行事例研究
- ・施設全体への情報提供
- ・子どもへのアプローチ
- ・
- ・

オープンな議論

- ・性意識ワークショップ
- ・性教育の見直し
- ・“暮らし”の見直し
- ・
- ・

性の取り組みを特殊なものとしなない工夫

ステップ1: 環境作り(C施設)

趣旨説明

- ・研究会の歴、メンバー、目的、趣旨の説明
 - ・取り組みを一緒に進めていくスタンス
 - ・
 - ・
- (施設内児童間性暴力事案の実態や傾向、施設職員の対応の例)

パワーポイントでロードマップのイメージ作り

コアメンバーの組織化

- ・新規採用職員から中堅、ベテラン職員まで職員の養成およびグループ化
 - ・研究会メンバーとの波長合わせ
 - ・
 - ・
- (当研究会と共同で実践モデルを作っていく相互理解)

オープンな議論

- ・アイスブレイクで参加者全員の自己紹介
 - ・趣旨説明後に各職員が困っていることや知りたい事について、研究会側とディスカッション
 - ・
 - ・
- (自分たちの行動は正しかったのか、施設内共有はどうしたらいいか)

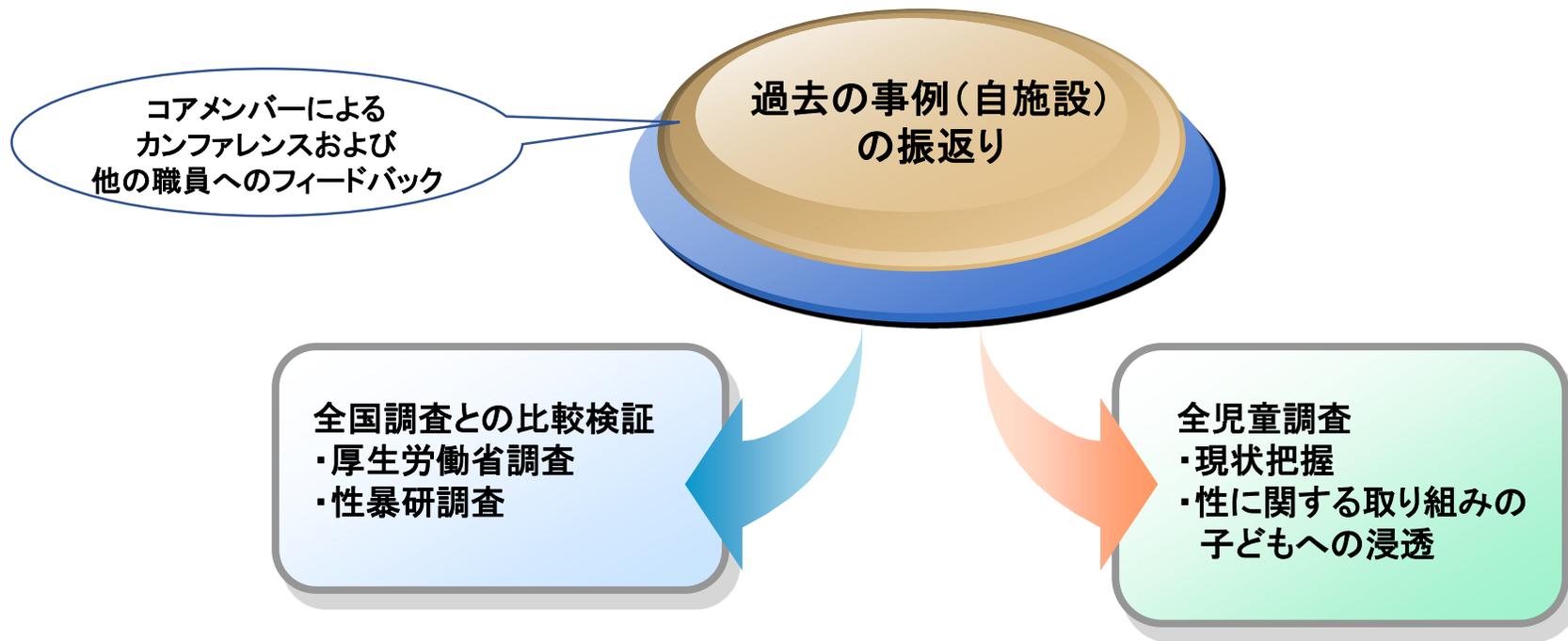
施設が独自に困っていたり、知りたいと思っているニーズ調査

モデル事業：第2回ワーキング(カンファレンス及びフィードバック)

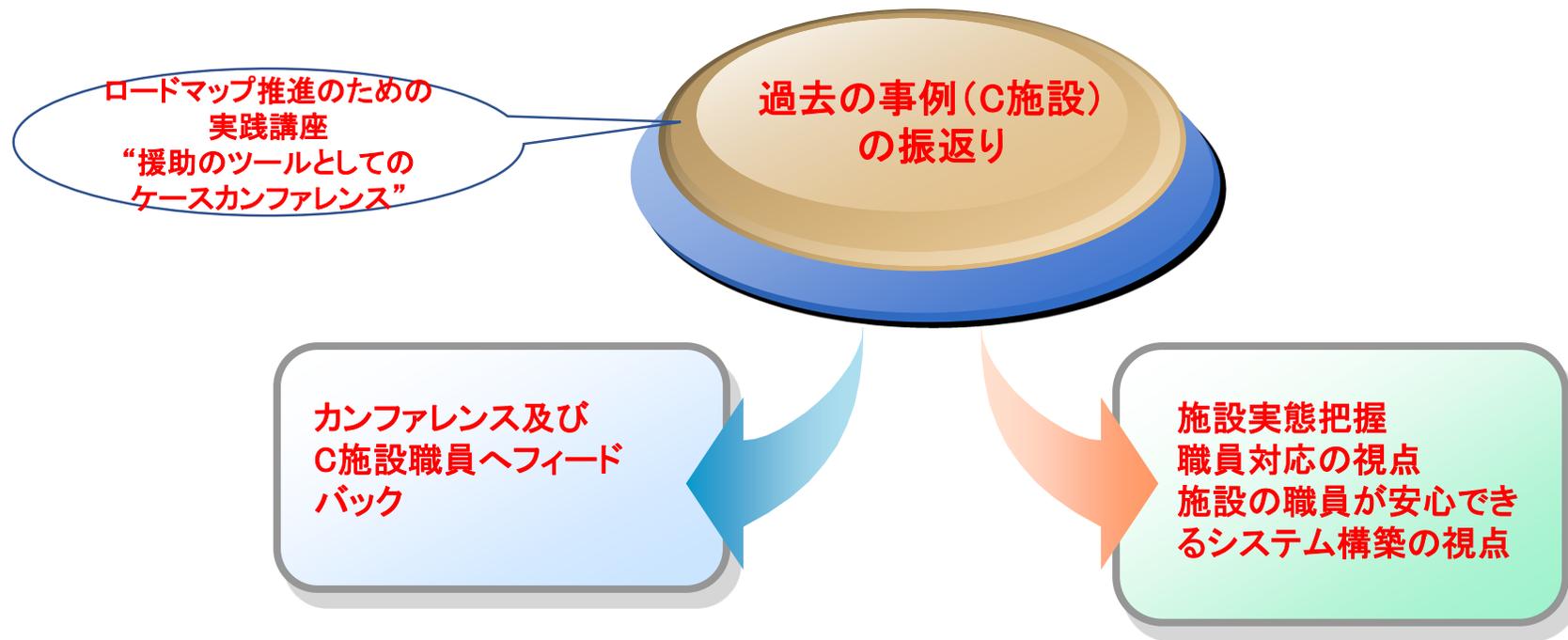
概要	2021年7月22日(木) 10時～12時 @C施設 研究会:2名 C施設職員:10名 参加
内容	5つのプログラム実施 ①オリエンテーション(前回第1回の振り返り) ②モデル事業の趣旨・概要(ロードマップ:ステップ1・2) ③ケースカンファレンスへの取り組み ④ロードマップ推進のため実践講座(カンファレンス) ⑤ケースカンファレンスの感想・今後の予定
成果・考察	女兒同士の性暴力が起きた際、個別支援プログラム依存に陥るわけではなく、普段の暮らしの中で、いかに職員間が統一した関りを行っていくかが大切。緊急事態に安心できるシステム構築の必要性。

第2回ワーキングを踏まえステップ2(実態把握)～ステップ3(課題抽出)へ
第3回ワーキングは職員対応、施設システムの視点について検討予定

ステップ2: 実態把握(例示)



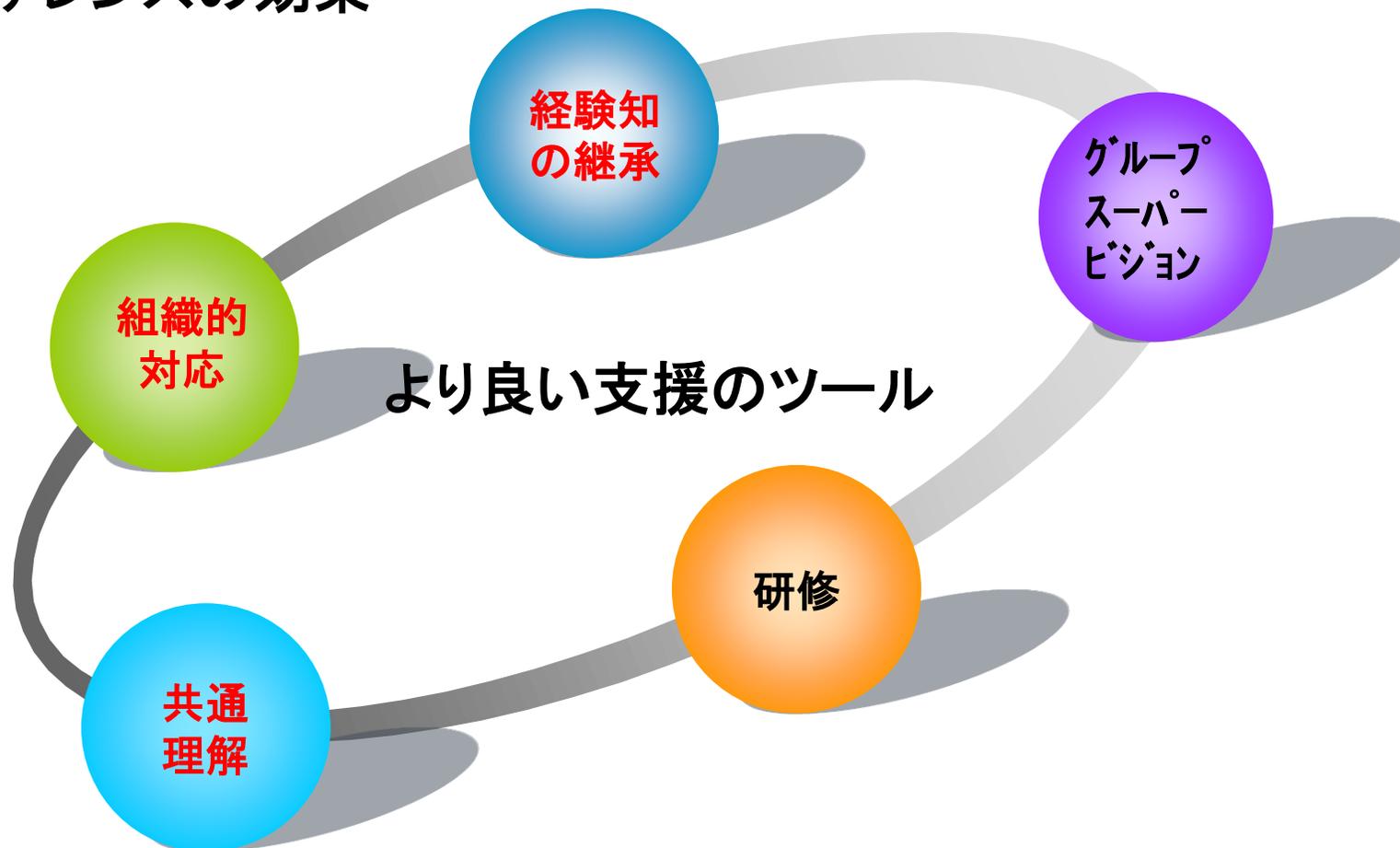
ステップ2: 実態把握(C施設)



協働で実践モデルを作り上げていく上でロードマップ推進のための実践講座
“援助のツールとしてのケースカンファレンス”とは・・・

第2回ワーキング:ロードマップ推進のための実践講座

カンファレンスの効果



第2回ワーキング:ロードマップ推進のための実践講座

カンファレンスの形態

1

【複数機関によるカンファレンス】

救護施設・生活保護関係職員等の機関が、入所者の支援方針を協議、調整のために実施するもの

2

【施設内のフォーマルなカンファレンス】

管理職員も含め、組織としての支援方針等を決定するためのカンファレンス

3

【施設内のインフォーマルなカンファレンス】

日常的な支援方法等を協議するカンファレンス

第2回ワーキング:ロードマップ推進のための実践講座

カンファレンスの種別

1

【個別支援C】
アセスメント、支援内容、
支援方法等に関して協
議し、一定の方向性を定
めるカンファレンス

2

【支援調整C】
個別のカンファレンスが
他の入所者あるいは他
機関の支援に影響を与
えるため、施設内外で調
整しコンセンサスを得る
ためのカンファレンス

3

【危機介入C】
問題行動への対処、安
全確保など、緊急の事態
が生じた際、組織的な対
応方法を検討するため
のカンファレンス

第2回ワーキング: ケースカンファレンスへの取り組み

活用ツール: 児童間性暴力に特化したカンファレンスシート

ケース概要		作成日	年	月	日
氏名	性別	生年月日	年 <td>月 <td>日</td> </td>	月 <td>日</td>	日
入所理由					
年齢					
生育歴					
事柄					
入所後の日常生活の様子					
家族構成【ジェノグラム】					
家族の特徴および家族関係					
心理面					
直近の判定歴と心理所見					
医療面					
直近の受診歴と医学所見					

性暴力 事案シート																							
事案発生日																							
発覚までの事案発生回数																							
事案発生場所																							
加害児童の情報						被害児童の情報																	
氏名		性別		氏名		性別		氏名		性別													
生年月日		年		月		日		生年月日		年		月		日									
入所年月日		年		月		日		入所年月日		年		月		日									
年齢 (事案発生時)		歳		学年		年齢 (事案発生時)		歳		学年		年齢 (事案発生時)		歳		学年							
知的能力		発達障害の有無		知的能力		発達障害の有無		知的能力		発達障害の有無		知的能力		発達障害の有無		知的能力							
性加害の経験		性被害の経験		性加害の経験		性被害の経験		性加害の経験		性被害の経験		性加害の経験		性被害の経験		性加害の経験							
被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験		被虐待の経験							
寝室に侵入する				下着を盗む				AV等を見せる				その他 ()											
裸を覗く				裸を記録・撮影する				裸になることを強要する				その他 ()											
自慰行為を強要する				加害児と他児の性行為を見せる				他児同士に性行為をさせる				その他 ()											
服を脱ぐ・脱がす				被害児の服を脱がす				加害児の服を脱がすよう強要する				その他 ()											
キスをする・させる				加害児と被害児がキスをする				被害児に触らせる				その他 ()											
体を触る・触らせる				場所				被害児に触らせる				その他 ()											
手指等を挿入する・させる				場所				被害児に手指等を挿入させる				その他 ()											
性器を挿入する・させる				場所				被害児に性器を挿入させる				その他 ()											
射精をする・させる				場所				被害児に射精させる				その他 ()											
加害児童の総人数 (上記児童らを含む)												被害児童の総人数 (上記児童らを含む)											

暴力の態様			
事案はどのように始まったか			
事案はどのように終わったか			
その他身体的暴力・心理的暴力などを伴っていたか			
発覚の経緯			
加害児童		被害児童	
緊急受診の有無	生活集団変更の有無	緊急受診の有無	生活集団変更の有無
一時保護の有無		一時保護の有無	
一時保護後の措置		一時保護後の措置	
事後のケア		事後のケア	
ケアの内容		ケアの内容	
ケース全体を通しての所感			

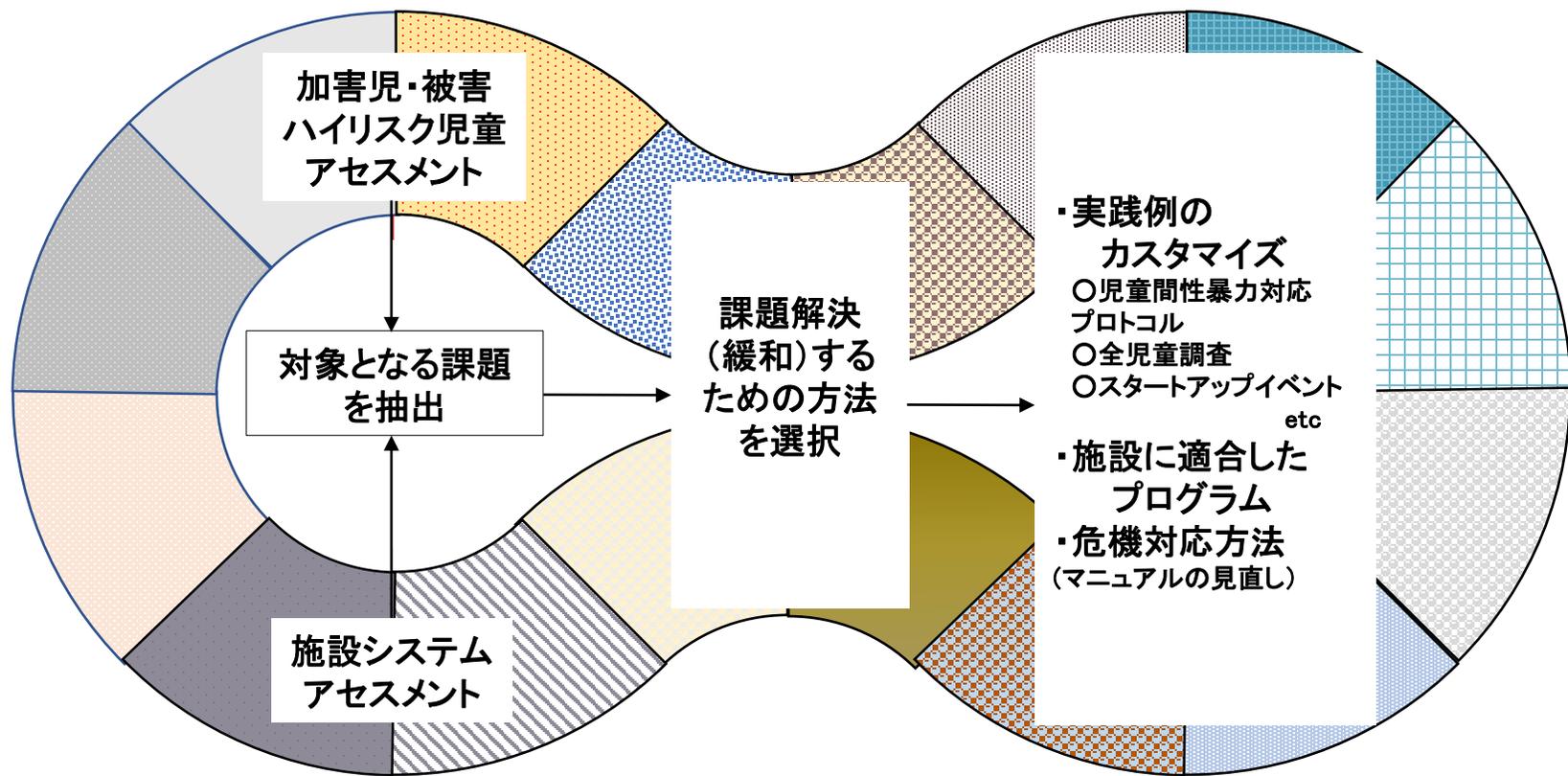
左側のシートが研究会で作成したケース全体の概要を掴むためのシート

右側のシートが研究会で作成した性暴力の事案を漏れなく把握するためのシート

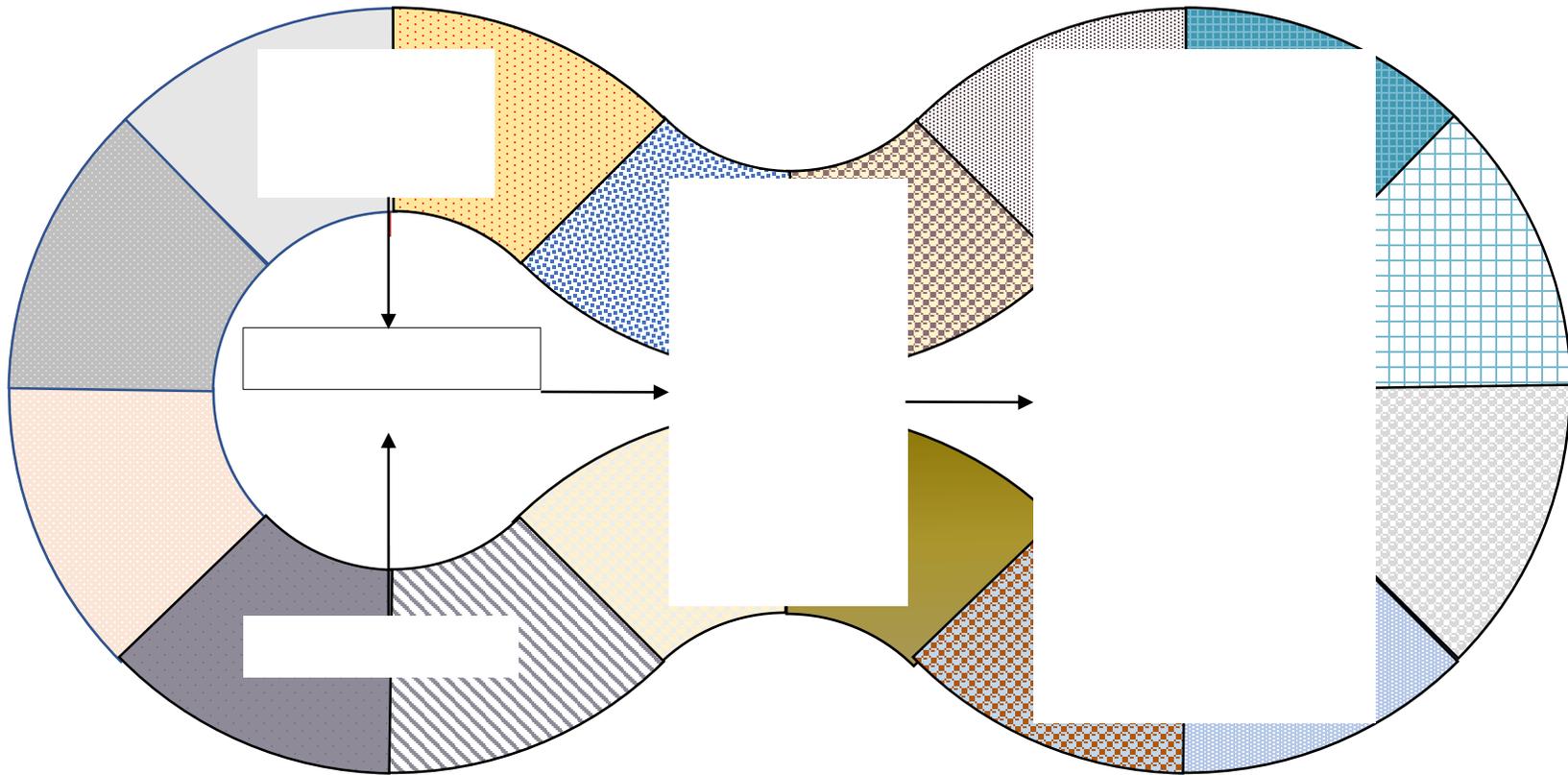
モデル事業：第3回ワーキング

第3回ワーキングは第2回を振り返りながら、ステップ3(課題抽出)について職員対応の視点、施設システムの視点から共同で検討し実践していく予定

ステップ3・4: 課題抽出、実施計画(例示)



ステップ3・4: 課題抽出、実施計画(C施設)



問い合わせ先等

※本研究会では現場の職員と研究者が協働して、実践モデルを策定することを主軸に
おいています。

「児童間性暴力“0”へのロードマッププログラム開発」を一緒にしていただける全国の児童
養護施設・児童自立支援施設・児童心理治療施設・障害児入所施設等を募っています。

関心のある方は、

→ 関西福祉科学大学 遠藤洋二 : yendo@tamateyama.ac.jp

※性暴研に参加ご希望の方は、

→ 神戸児童間性暴力研究会事務局 : fukka.seibou@gmail.com

※ホームページ : <https://www.kobeseibouken.com>

※研修やワークショップをしたいなど、その他お問い合わせ

→ 関西福祉科学大学 遠藤洋二 : yendo@tamateyama.ac.jp